【原 著】

保育所保育における複数担任制の利点と問題点

中平 絢子 馬場 訓子 高橋 敏之

Advantages and Disadvantages of the Multiple Class Teacher System in Nursery School Childcare

Ayako NAKAHIRA, Noriko BABA, Toshiyuki TAKAHASHI

2015

岡山大学教師教育開発センター紀要 第5号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.5, March 2015

原 著

保育所保育における複数担任制の利点と問題点

中平 絢子^{*1} 馬場 訓子^{*2} 高橋 敏之^{*3}

保育所では、「児童福祉施設最低基準」に基づき、子どもの年齢と人数によって保育士の配置が決まっている。本論では、保育所保育士から聞き取り調査を行い、3歳以上児保育の複数担任制の利点と問題点について、職員間の連携を現状を踏まえながら検討した。その結果、複数担任制は、安全面の確保、保育の充実、保育の幅が広がる等の利点があること、「連携」「共通理解」「話し合い」等は利点である一方、問題点になる場合もあることが明らかとなった。

キーワード：3歳以上児学級、保育所保育、保育所保育士、複数担任制、正規保育士

※1 岡山大学大学院教育学研究科大学院生

※2 くらしき作陽大学

※3 岡山大学大学院教育学研究科

1 研究の背景

1 保育所保育における複数担任制

我が国における大多数の幼稚園では、学級担任は、一人担任制が主である。馬場ら(2012)は、幼稚園における一人担任制の問題点を明らかにし、チーム保育の重要性を指摘した⁽¹⁾。一方、保育所の場合は、厚生労働省「児童福祉施設最低基準」に記載があるように、0歳児3人につき1人、1・2歳児6人につき1人、3歳児20人につき1人、4歳児以上児30人につき1人と、年齢と人数によって配置される保育士数が異なっている。保育所の3歳以上児は、幼稚園3年保育の園児と同じ年齢であるが、幼稚園で主となっている一人担任制に対して、保育所では子どもの人数が多い学級であれば、3歳以上児の学級でも複数担任制が採られている場合がある。

保育所では、上述のように子どもの人数により職員配置が決まっている。複数担任制が多い保育所においても、職員間の連携をどのように図っていくかは、保育現場における重要な課題の1つであるだろう。佐々木(1979)は、乳児保育の研究の中で、複数担任制の役割分担について実態把握と今後のあり方を検討し論述した⁽²⁾。近年、保育所における複数担任制に関する研究は、あまり見受けられない。本論では、幼稚園と比較及び検討ができる3歳以上児に焦点を絞り、3歳以上児学級の保育所における複数

担任制の利点と問題点を明確にする。さらに、打開策として職員間の連携について現状を踏まえながら検討する。

2 保育所保育に関わる配慮事項と複数担任制の必要性

保育所には、0歳児から就学前の子どもが入所している。保育所では、発達過程を考慮して、3歳未満児の保育を3未保育、3歳以上児の保育を3上保育と呼び、区別している。3歳未満の乳幼児を保育する場合は、おしめをかえたり、食事の介助をしたり、あやしんだり、寝させたりなど、養護的側面を重視しているため、少人数ごとに保育士が配置され、より細やかな配慮が必要とされている。『保育所保育指針』においても、乳児保育、3歳未満児保育、3歳以上児保育に関する配慮事項は分けて記載されている⁽³⁾。

乳児保育、3歳未満児保育に共通して挙げられている配慮事項は、一人一人の状態を把握し、情緒の安定を図り、特定の保育士との関わりが大切である点、担当保育士が替わる場合は配慮が必要である点の2点である。これは、養護的側面が特に重視される3歳未満児にとって、ある程度固定された保育士との関わりが必要不可欠であることを示しているのだろう。3歳以上児保育では、基本的な習慣や態度を身に付け、自己を十分に発揮し、友達との関わりを持ち、共に育ち合えるように配慮することが挙げられている。

家庭で過ごす乳幼児と比べ、保育所に通う乳幼児は長時間保育を要し、保育所で過ごす時間が長いと推測されるため、保育所では家庭的な雰囲気の中で、より密着した関わりが求められているだろう。

II 方法

1 調査協力者

中国・四国地方の認可保育所に勤務し、3歳以上児の学級を複数担任で受け持っている保育士28名を対象に、聞き取り調査を行った。『全国の保育所実態調査報告書2011』では、運営主体別正規保育士の年齢別の配置割合は「20代」が全体の32%であり、「30代」が25.3%、「40代」が19.9%であった⁴⁾。そのため本論では、配置割合の多い20代から40代を調査対象とした。調査協力者の年齢層の人数区分は、表1の通りである。調査協力者は、保育所に勤務しており、保育士歴は3年から25年未満である。そのうち、複数担任になる場合に、熟練保育士や新人保育士、若手保育士など幅広い年齢層と組む割合の高い勤務8年から17年未満の中堅保育士のうち5名を対象に、具体的な聞き取り調査を行った。5名は共に正規保育士であり、概要は表2の通りである。

表1 調査協力者の年齢層

年齢	20代	30代	40代
人数	9人	14人	5人

表2 具体的な聞き取り調査を行った調査協力者

仮名	年齢層・性別	経験年数	担当年齢
A	30代・女	11年	3歳児
B	30代・女	12年	5歳児
C	20代・女	8年	4歳児
D	30代・女	10年	5歳児
E	40代・女	17年	4歳児

2 調査期間

2014年8月から10月の3か月の間に実施した。

3 倫理に関する配慮事項

いずれも、勤務する保育所や個人が特定できないように配慮した。また、調査内容は、本論以外では使用しないこと、答えに抵抗を感じる質問には無回答でも良いことを伝えてから開始した。

4 調査内容

質問事項は、保育所における複数担任制の中で、「保育の分担について」「複数担任で保育を行う上で大切にしていること」「複数担任で保育を行う上で困っていること」を中心に、回答内容に即して適宜、質問を追加した。また、5名の中堅保育士には、質問に対して具体例を挙げてもらうように依頼した。

III 結果及び考察

以下に、調査協力者全員の回答をまとめ、考察する。さらに、具体的な聞き取り調査を行った保育士5名の事例を一部抜粋し、考察する。調査協力者の言葉を忠実に記載することで、現場の保育士の考えが読み手に伝わるように考慮した。

1 保育の分担

(1) 保育士の配置

調査協力者の受け持つ学級の保育士の配置に関する概要は、表3・4の通りである。担当している学級の子どもの人数によって保育士の配置数は異なるだろうが、今回の調査では、3上学級の保育士の配置は、2人または3人ばかりであった。また、正規保育士同士で受け持つ割合よりも、正規保育士と臨時保育士、または正規保育士とパート保育士等で受け持っている割合が多かった。『全国の保育所実態調査報告書2011』では、保育所内の職員体制に関して、「非正規保育士の導入が進んでおり、公営保育所では特にその傾向が顕著」⁵⁾「正規保育士を削減し限られた人員体制で対応を図らざるを得ないという保育所の実像であり、職員の労働条件の厳しさ」⁶⁾と指摘されているように、保育所では正規保育士の割合が少なく、正規保育士同士の配置は難しいのが現状である。

表3 調査協力者の学級の概要

担任の人数	2人	3人	4人
協力者の人数	23人	5人	0人

表4-1 担任の区分（2人担任制）

担任の区分	正・正	正・臨	正・その他
協力者の人数	5人	15人	3人

※正は正規保育士、臨は臨時保育士である。

※その他はパート保育士等である。

表4-2 担任の区分（3人担任制）

担任の区分	正・正・臨	正・臨・臨	正・臨・その他
協力者の人数	2人	1人	2人

（2）保育の役割分担の有無と交替

表5のように、保育の役割分担は、全ての調査協力者が行っていると回答した。しかし、表6のように、配置されている保育士が正規保育士や臨時保育士であるか等によって、主となり学級全体の運営に携わっていたり、補助的立場として携わっていたりと様々であった。

正規保育士同士で受け持っている場合は、主となる担当を1週、もしくは2週で交代している場合が多い。学級運営を考えた場合、主（担任）や副（担任）という役職や立場の分担ではなく、保育所で行われている保育の分担は、保育の進行を中心となって行うというものである。

表5 保育の分担の有無

保育の分担の有無	している	していない
協力者の人数	28人	0人

表6 保育の分担の交代の有無

分担の交代の有無	あり	なし
協力者の人数	13人	15人

保育所では、保育の分担を「主・副・雑」や、「主・副1・副2」などの名称で区別している。ここでは、聞き取り調査で多くの調査協力者がイメージしている保育の役割について、まとめてみよう。

①主の役割

複数担任の場合、主となる保育士は、保育の計画、実践、発展等を中心となって行っている。また、週案の作成、反省の記入も主が行っている。学級全体の子どもの前で、本や紙芝居を読んだり、集いをしたり、話をしたりなど、学級運営及び保育活動の中心的役割を果たしている。

②副（副1）の役割

主の補助的な立場にあり、保育の補助を行ったり、環境構成及び再構成を行ったり、保育の準備や片付け等を行う。また、支援の必要な子どもの側について、個人的な配慮を行うこともある。

③雑（副2）の役割

主と副の補助を行う。副の役割と同じ場合もあるが、主に保育の準備や片付けを行う。

2 保育中の分担に対する保育士の思い

それでは、保育中の分担に対して保育士はどのように感じているのか、具体的な聞き取り調査を行った結果をまとめて探ってみよう。表7に示すように、保育士A・Bは、正規保育士2名で保育を行っている。保育士Cは、正規保育士1名と臨時保育士2名で保育を行っている。保育士Dは、正規保育士1名、臨時保育士1名、その他の保育士1名で保育を行っている。保育士Eは、正規保育士1名、臨時保育士1名で保育を行っている。聞き取り調査の中で括弧書きにしている部分は、読み手に分かりやすいように筆者らが加筆したものである。聞き取り調査の中の波線部分は、調査協力者の具体的な現状を示し、直線部分は、調査協力者の意見を示している。

表7 具体的な調査協力者の保育体制

仮名	保育士数(正・臨・その他)	主の交替の有無
A	2 (2・0・0)	1週交替
B	2 (2・0・0)	2週交替
C	3 (1・2・0)	なし
D	3 (1・1・1)	1週交替
E	2 (1・1・0)	1週交替

事例1. 保育士A

私の学級は、(分担の交代を) 1週交替にしている。主は学級全体を引っぱって行って、副がその補助的な感じ。例えば、主が前で紙芝居を読んだり、話をしたりする時に、副が子どもと共に座って主の話を聞いたり、話に集中できない子どもの援助をしたりとか。遊びの計画や内容は主が考えているけど、一応相談もしている。来週は何をしようかなとか、部屋の環境とか色々。1週交替だと、週案を書くペースも丁度いい。2週交替だと長く感じるから。(担任同士で)一緒に子どもを見ているから、特に困ったこともない。

事例2. 保育士B

2週交替かな。前は1週にしていたんだけど、主がすぐにまわってくるから。2週だと保育案も立てやすく、自分のペースで保育が出来る。でも、行事の前とかはずっと主だと辛いこともある。運動会前に、練習をするけれど、主が練習を考えていくようにしているから。一緒に組んでいるのが年配の先生だから、(指導方法は)これでいいの

かなと不安になることもある。保育を展開していった方がいいのだろうか。私に任せてくれている様子も感じるから、反対にどうですかなど聞きにくいし、そういうときは本当にどうしようと思ってしまう。

事例3. 保育士C

正規保育士がずっと主をしています。やはり、自分が学級の長としてしっかりしないと、という思いがあるからです。副担任には、補助的な動きをしてもらうことが多いです。でも、話し合いは、多く持つようにしていますよ。具体的なところだと、子どもの前に立つのは、主ですね。話をしたり、給食の指揮を執ったりしています。副担任は、保育の色々な準備をお願いしたり、活動するときに手伝的なことをお願いしたりしますね。

事例4. 保育士D

週ごとに主は替わるようにしています。担任が3人いるので、3人で替わっています。主・副・雑と分かれています。主は保育、副は主の補助、雑は雑用全般を中心に分担しています。例えば、トイレに行くとき等、主が先頭を歩いて連れて行き、子どもを見守っている途中で副がやってきます。そこでバトンタッチをして、主は早くすんだ子どもの対応をします。時々、(主と副や、副と雑とが)動きが重なったりしてしまうこともあります。

事例5. 保育士E

1週ごとに替わってるよ。今までずっとそうだったから。保育園の方針というか、暗黙の了解みたいな感じかな。不便に感じたこともないし、無理もなくていい感じじゃないかな。ずっと主をするって疲れるしね。子どもも、その方がいいんじゃないかな。

事例1・2・3・4・5から、保育士Aや保育士Bのように、正規保育士が2名、または3名いる場合は、正規保育士間で主の交替をしている。保育士Aと保育士Bは、主の交替が1週と2週とで異なるが、両者に共通して、保育の計画は、主が考えている。保育士Bは、保育の相談に抵抗を感じると言っているが、

これは先輩保育士と共に学級を受け持っていること、保育士として自分なりに保育を発展させ、どうにか対応しようという考えがあることを後の質問で答えている。

保育士Cは、正規保育士と臨時保育士で学級担任を受け持っているが、主は正規保育士のみで行っている。反対に、保育士Dと保育士Eは、保育士Cと同じように正規保育士と臨時保育士とで受け持っているが、分担は、担任間で同じにしている。

上述の聞き取り調査結果から、現場で働く保育士にとって、保育の分担は、負担に思うものではなく、仕事の軽減につながるよい方法であると確認できる。保育士Aが「週案を書くペースも丁度いい」と答えているように、保育士は、日々の子どもの保育のみでなく、事務仕事も業務として行っているため、保育に関する計画の作成、反省等など、複数担任がいることで、仕事の量や負担が軽減されていることが、明らかとなった。

一方で、保育士Cが述べるように、複数担任であっても、正規保育士と臨時保育士や、正規保育士とパート保育士等が組んでいる場合、どちらか一方が、常に主となって動き、もう一方は、補助的立場で固定されている場合もある。以上から、担任間の雇用形態が同じ場合は、保育の分担は多くは交替で行われており、担任間の雇用形態が異なる場合は、正規保育士の保育に対する考えなどによって保育の分担方法が決められていることが、判明した。

3 複数担任制で大切にしていること

次に、複数担任制の中で、最も大切にしていることについて質問した。「職員間の連携」「連携」など、同じ意味を持つ言葉は、同一として数えることにした。回答は、以下の通りである。調査協力者28名中、「連携」と答えた人は、15名だった。「共通理解」と答えた人は、7名であり、「職員間の話し合い」は、2名、その他「信頼関係」「保育のねらいを同じにすること」「子どもへの対応を同じにする」「譲り合うこと」が、各1名であった。

調査協力者28名中、半数以上が「連携」という言葉を挙げた。複数の人が同じ目標に向かって協力する場合、「連携」という言葉が用いられる場合がある。保育所でも、子どもとの連携や、保護者との連携、保育士同士の連携など、連携という言葉が頻繁に使われている。保育は、協力して行うものであるという意識があると考えられる。「共通理解」に関しては、『保

育所保育指針』第7章「職員の資質向上」の部分で「保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人一人が、保育実践や研修などを通して保育の専門性を高めると共に、保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協働性をたかめていくこと」⁽⁷⁾と記されている。さらに、「保育の内容について職員の共通理解も不可欠」⁽⁸⁾「職務内容についての共通理解も大切」⁽⁹⁾「子どもの保育及び保護者支援は、保育所の方針のもとに組織される職務分担や学級担任配置等によって計画的、組織的に実施」⁽¹⁰⁾され、「その際、職員同士がそれぞれの職務内容についてよく理解し合うことで、どのような場合にどのような連携が必要なのか判断できるようになり、それによって、それぞれの専門性を発揮した職員の協力体制が可能となる」⁽¹¹⁾と具体的に示されているように、保育所における職員間の共通理解は、必要不可欠である。

保育士は、保育という同じ環境や目的の下で、互いに協力をしながら、子ども理解や保護者との関わり、保育の進め方や保育をどのようにしていくのかなどを共通して理解することを大切にしていることが、「連携」や「共通理解」が挙げられたことから判明した。

4 複数担任制の利点

調査協力者5名が考える、「複数担任制を行う上での利点」は、以下の通りである。

事例6. 保育士A

1人では保育に行き詰まってしまうかもしれないけれど、2人いることで安心する面がある。例えば、子どもがけんかをしていて、そちらに着かなければいけない場合でも、他の子どもをほっておくことなく、けんかをしている子どもとじっくりと話し合うことができる。1人だったらそうはいかないと思う。他には、私はピアノが苦手なんだけど、もう1人の先生は得意だから、発表会にお願いすることができるしね。お互いの得意、苦手なことなどもフォローし合えるところが一番の利点だと思う。

事例7. 保育士B

もうある程度保育歴も有るし、慣れている部分も多いけれども、他の先生と一緒に組むことで色々な刺激にもなるし、保育の幅も広がると思う。若い保育士さんだと、新しい手遊びを教えて貰えるし、先輩の保育士さんだと、保護者対応や子ども

もの対応など、たくさん勉強になる部分が多い。

行事になると特に複数担任のありがたさを感じる場面が多いと思う。あとは休みを取りやすいといった面も利点かも。子どもの学校行事で休みが欲しいときに、一人担任制だとなかなか取りにくいけれど、複数だと気持ちも楽にお願いできるしね。

事例8. 保育士C

保育士間で話し合いが行えたり、困ったときにすぐに聞くことができます。1人で子どもを見るよりも、たくさんの目があることになるから、怪我の防止にもなるし、何かあったときにすぐに対応できます。外で遊びたい子どもと部屋で遊びたい子どもがいたときに、複数担任だと、両方を把握できて、その場にいることが可能になるので。保育で一番怖いのは、子どもだけの環境の時に、何か怪我やけんかになることだと思っているので、複数で見られるということは、とてもありがたいことだと思います。

事例9. 保育士D

3人いることで、子どもとの関わりが密になっていると感じます。一人一人としっかりと関われるというか。保育の分担もできるし、子どものことを丁寧に見ていけるし、複数担任はいいことも多いと思います。1人だとなんか見過ごしてしまうことも、後の2人がいるおかげで、見落とさずにすむことも多々ありますね。先日、園外に出かける行事があったのですが、欠席していた家庭への連絡をすっかりと忘れていたのですが、他の職員が気付いてくれて、連絡を入れることができました。そんなささいなことだけど、複数の良さを感じましたね。

事例10. 保育士E

保育面はもちろん、融通が利きやすいことかな。研修にもいきやすいよね。保護者対応にしても、保護者によっては対応しやすい、しにくいがあると思うけど、そんな時も場と状況によって出て行く職員が決められることもあるし、本当は、皆同じ対応や反応がいいんだろうけど、個性もあるからね。その人なりというか、向き不向きがあ

るんじゃないかな。そういった面では、担任が数人いることはいいってことだね。

事例6・8から分かるように、保育士Aと保育士Cは、安全面の把握がしやすい点を挙げている。保育所では、安全面の把握は、必要不可欠であるだろう。階段から落ちたり、はさみで手を切ったりすることもあるだろう。跳び箱や鉄棒や巧技台などの体育遊具も、時には怪我や事故の原因となるだろう。子どもが遊ぶ環境の中に、より多くの保育士がいることで事故や怪我の軽減につながるならば、複数担任制は、導入するほうが望ましいと考える。

事例7から分かるように、保育士Bは、自分の保育観が広がることや、保育の力量を培うことにもつながることを指摘している。若手保育士の新鮮な保育情報や、熟練保育士の経験による保育方法や保育技術を学ぶことが可能になり、その結果、保育内容も充実したものになると考えられる。

事例7・10では、保育士Bと保育士Eは、仕事の融通の利きやすさを挙げている。保育士自身が働きやすい環境にいることは、子どもへの対応や保護者の対応に関してもゆとりを持って、温かく接しやすい。

事例9・10では、保育士Dと保育士Eは、一人一人の子どもとの関わりが増え、保育における連絡等の漏れを防ぎやすい点を挙げている。保育士にも個性があり、保護者への対応も保育士間で相談して行えることは、複数担任制の利点と考えられる。

5 複数担任制における問題点と課題

子どもを複数で保育することができ、保育や子どもの対応などの話し合いも行え、仕事の融通も利きやすい点が利点として挙げた複数担任制だが、複数担任制であるため保育士が困難や負担に感じる点はないのだろうか。調査協力者28名のうち、この質問に回答の協力があつたのは20名であつた。回答は、以下の通りである。

- 連携をとることに困難を感じる。
- 合う、合わないがある。
- 一人の方が気楽である。
- 相手の意見を聞かなければならない。
- 共通理解が難しい。
- 保育に対する考え方が異なる。
- 子どもをあまりみてくれないと感じることがある。

- 意見が合わない。
- 年齢が違うことでギャップがある。
- したい保育が違う時、結局、全部の負担が自分にかかってくる。
- 同じ方向を向けられるかどうか不安。
- 話を通じないことがある。
- 話し合いにならない。
- 仕事の量に差がある。

複数担任制で利点として挙げられた「連携」「共通理解」「話し合い」が、困難さを感じる点にも挙がっている。例えば、子ども同士の友達関係を考えた時に、価値観が合う、合わないは大きな問題となるだろう。保育士という立場でも同様に、同じ学級を受け持つ者同士の価値観、保育観、保育に対する思い、願い等によって、一緒に保育を行うことに困難さを感じる場合もあるようである。

事例11. 保育士B

子どもに対する接し方が異なる時点で、意見の対立は出てくるね。例えば、子どもが自分勝手な行動をしている時に、何も声をかけずにほっておく人と、何をする時かきちんと話をする人とは、対応が違うでしょう。きちんとさせたいという思いと、別にいいやという思いと、それは様々な場面面で出てくることだし、それが一年間続くと思うといやになるかも。

事例12. 保育士C

発表会でしたい内容が違った時は、困りました。先輩保育士だったから、自分の意見を強く言うわけにもいかず。そう思うと、自分が一番上に立っていたり、もしくは、一人担任だったりするほうが、保育を進めていく上では、楽なことが多いかもかもしれませんね。

事例13. 保育士D

話し合いは、なるべく持とうと思っているけれど、なかなか時間も取れないし、何となく日々進んでいるような気がする。だからか、子どもや家庭の情報が、共有できていないことになって、「先生知らなかったの」なんて言われることもある。一つのことをみんなですることは、仕事量は減るけれど、内容をきちんと知っておかないと、大変

なことになるっていうのは身にしみている。だけど、時間が無いのが悩むところ。

事例 14. 保育士E

分かりません、できませんばかりを言われると困る。いくら保育士歴が短くても、現場に出ると1人のプロなんだから、もっと何でも意欲的に取り組んで欲しいと思う。失敗したっていいと思うし、そのために私たちのような他の保育士が付いているんだし。

事例 11・12 から分かることは、子どもへの対応の違いや保育に対する考え方は、保育士により異なるだろうが、複数担任の場合は、対応を同じにする必要があるということである。それは、子どもにとっても「〇〇先生はいいと言う」「△△先生はだめと言う」といったように、混乱を招くことになり、生活の見通しが持ちにくく、保育士の対応によって右往左往させられることになってしまうからである。

保育に対する考え方が異なる時に、困難を感じた場合どうするかを保育士B・C・D・Eに尋ねたところ、共通して「相手による」という考えであった。相手が先輩保育士である場合は相手の意見に従い、同等の場合は話し合いを持ち、若手保育士の場合は自分の意見を出しやすいと言える。保育の力量は、経験年数と共に培われていくこともあるため、このような結果になると推測される。保育士は、自分より経験年数の長い保育士には、意見が言いにくい場合が多いと言える。一方、**事例 14** のように、若手保育士に対して意欲的な態度や発言を望んでいる場合もある。

事例 13 から分かることは、保育の話し合いの大切さである。職員会議、打ち合わせ、3未会議や3上会議などの保育の話し合いを持つ保育所は多数あるが、学級単位の決まった会議を持つ保育所は少数しかない。多くの場合、**表8**のように、保育の話し合いは、休憩時間の談話、勤務後の時間、午睡の場面などで行われているようである。「3歳未満の担任の時は、午睡中もよく話し合いをもったけど、3上は子どもが話を理解して聞いていることもあるから、なるべくしないようにしている」といった意見もあった。

子どもへの対応や保育に対する考え方を同様にするためには、保育の話し合いが重要である。学級担

任同士の保育についての話し合いは、担任間の連携を密にし、子どもの理解を深めるものになるだろう。会議や打ち合わせ等は、学級を超えた保育所全体での共通理解の場となる。

表8 学級単位の話し合いの場

午睡時	学級会議	休憩中	勤務後	その他
10人	2人	20人	26人	5人

※複数回答可とした。

IV 複数担任制の利点と問題点

本論の調査で、保育所における複数担任制は、安全面の確保、保育の充実、保育の幅が広がる等などの理由により必要であり、利点があることが明らかになった。しかし、一方で複数担任制で大切にしている「連携」「共通理解」「話し合い」などが、実際は、困難さを感じる原因となっている場合もあることが明らかになった。子どもの遊びや生活を、より多くの保育士で見守り、充実した学級運営を行っていくためには、可能な限り日々の話し合いを保育士間で多く行い、相談したり意見を出し合ったりできるような柔軟性を持った職員関係を築くこと等が望まれるであろう。岡部ら(1977)も、複数担任制実施上の問題の解決策として、「担任保育の年齢構成を考慮すること」「担当者間の話し合いの時間を設定すること」「乳児保育担当者を対象として乳児保育に関する全般的研修も必要」と述べている⁽¹²⁾。

今日、保育における特別な配慮を必要とする子どもは、増加傾向にある。現状の「児童福祉施設最低基準」の保育士の配置では、子どもへの対応が困難になる場合もある。例えば、3歳児が制作活動ではさみを扱う場合、20対1の保育士配置では、1人1人を丁寧に指導することは難しい。一斉活動ではなく、小集団での活動を考えても、小集団を指導している間、その他の子どもは保育士のいない環境にいることになる。細やかな対応を行うためにも、配置基準を超えた複数担任制が望ましい。今後は、調査数を増やし、より正確な分析と考察を行う予定である。

註

- (1) 馬場訓子・中平絢子・高橋敏之：「幼稚園教育におけるティーム保育の教育的妥当性」、『岡山大学教師教育開発センター紀要』第2号, pp.24-32, 2012年.
- (2) 佐々木英子：「保育所における乳児保育の研究—

複数担任制の役割分担についての一考察一], 『日本保育学会大会研究論文集』(32), pp.232-233, 1979年.

(3) 全国社会福祉協議会:『新保育所保育指針』, pp.22-23

(4) 全国保育協議会:「全国の保育所実態調査報告書 2011」 p.11, 2004年.

(5) 全国保育協議会・前掲書 (4), p.11

(6) 全国保育協議会・前掲書 (4), p.11

(7) 全国社会福祉協議会・前掲書 (3), p.138

(8) 全国社会福祉協議会・前掲書 (3), p.138

(9) 全国社会福祉協議会・前掲書 (3), p.138

(10) 全国社会福祉協議会・前掲書 (3), p.138

(11) 全国社会福祉協議会・前掲書 (3), p.138

(12) 岡部茂・佐々木英子:「保育所の乳児保育における複数担任制に関する調査報告」, 『日本保育学会大会研究論文集』(30), p.238, 1977年.

Advantages and Disadvantages of the Multiple Class Teacher System in Nursery School Childcare

Ayako NAKAHIRA^{*1}, Noriko BABA^{*2}, Toshiyuki TAKAHASHI^{*3}

The number of nursery staff is subject to children's ages and numbers, in accordance with Child Welfare Institution Lowest Standards. For this discussion, I interviewed nursery-school teachers, taking the current internal cooperation among staff into account, and thereby examined pros and cons of the multi-class teaching system for children 3 years old and older. The results show that the multi-class teaching system enhances safety, contents, and variety of childcare and that cooperation, common understandings, discussions, and so forth are not necessarily advantages.

Key words : child class 3 years old and older, nursery school childcare, nursery teachers, multiple class teacher system, regular childcare person

※ 1 Master program student of the Graduate School of Education, Okayama University

※ 2 Kurashiki Sakuyo University

※ 3 Graduate School of Education, Okayama University